

2020年7月19日

刈り入れの時まで

年間第16主日です。今日のマタイ福音書では、先週に引き続き、天の国が畑にたとえられて説明されます。福音書の中でも大変ユニークな「毒麦のたとえ話」に注目いたしましょう。「ある人が良い種を畑に蒔いた」（マタ11・24）という大変穏やかな冒頭ですが、物語は急展開していきます。

「人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った」（マタ11・25）。どこから入り込んだのか、夜、眠っている間、畑に毒麦が蒔かれてしまいます。畑の主人にとっては悲しい出来事です。ところが、さらに驚きの展開が続きます。僕〈しもべ〉たちが毒麦に気づき、主人に報告すると「主人は、『敵の仕業だ』と言い」（マタ11・27）、その出来事を知っていたのでした。当然のように僕たちは毒麦を畑から取り除こうと提案しますが主人はこれを拒否し、「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい」（マタ13・30）と謎めいた返答で応じます。さまざまな解釈がありますが、初代教会には善人と悪人が共存していたことを示すものであるという説明も見受けられます。

この毒麦のたとえ話を理解する鍵は、第一朗読の知恵の書にあるのでしょうか。

「力を駆使されるあなたは、寛容をもって裁き、大いなる慈悲をもってわたしたちを治められる。力を用いるのはいつでもお望みのまま。神に従う人は人間への愛を持つべきことを、あなたはこれらの業を通して御民に教えられた。」（知恵12・18-19）

知恵の書によれば、神さまは、寛容さをもってわたしたちを裁き、慈悲によって治められる方であることを示します。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせ」（マタ5・45）、「恵み深く、心のひろいかた」（詩編86）であることがわかります。毒麦のたとえ話は、改めて、わたしたちが天の父の子どもとして「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタ5・44）と呼びかけられたことを思い出させます。また自分にとっては好ましくない出来事でさえも、御父の愛と寛容さを学ぶチャンスに変えていくことができる、という特別なメッセージなのかもしれません。

新型コロナウイルス感染症の再流行、九州地方を中心とした豪雨災害と間断なく災禍が続く毎日ですが、神さまはわたしたちの「言葉に表せないうめき」（ロ

マ8・26)をご存知であることを忘れず、信仰・希望・愛を深めることができますように。

「“霊”は、
弱いわたしたちを助けてくださいます。
わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、
“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって
執り成してくださるからです。」

(ロマ8・26)

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝